

い。日本漫画の英語版はほとんどなく、地元の出版社によって出版された日本漫画の英語版は、数冊だけしかない。シンガポールのいくつかの出版社が、日本漫画の英語版の出版を試みたが、全てが失敗に終わった。例えば、M. G. Creative という小さな出版社が *What's Micheal* の英語版を出版したが、ほどなくして倒産に追い込まれた。地元の英語版漫画の大手出版社である Asiapac は『コボちゃん』の英語版を出版したが、反応は芳しくなく、該社は日本漫画の英語版の出版を断念した。アメリカと日本で出版された日本漫画の英語版は、あまり輸入されていない。マレーシアとインドネシアは、百種類ほどの日本漫画のマレー語版を売り出したそうだが、シンガポールに入ってきたのは、『ドラえもん』と『ドラゴンボール』といった数種類のものだけである。日本漫画のタミール語版は一冊もない。一方、9割以上の日本アニメは地元テレビ局で中国語に吹き替えられて放送される。ビデオCDも中国語版（吹き替え或は字幕）ばかりである。それゆえ、シンガポールのマレー系とインド系の人々は、日本漫画とアニメと接触する機会があまりない。日本漫画とアニメは中国語ができる華人のサブカルチャーとなっている。しかし、シンガポール人口の77%を占める華人の中でも、中国語が得意でない人もおり、それがシンガポールでの日本漫画とアニメの発展を阻害する要因となっている。それは、シンガポールの日本漫画とアニメ文化が、華人が大部分を占める台湾や香港に及ばない理由の一つである。

第二に、漫画とアニメは若者、特に若い男性の文化である。日本では、子供だけではなく、サラリーマン、OL、主婦もたくさんの漫画を読んだり、アニメを見たりする。台湾と香港も、日本漫画とアニメを熱中する大人が多い。シンガポールでは、日本漫画とアニメは若者、特に男子中高生に好まれる。子供は、ビデオゲームに熱中しているが、中国語があまり得意ではないので、読んでいる漫画のほとんどは英語のものである。大人と高齢者は、更に保守的で、もちろん日本漫画とアニメに興味を持たないし、自分の子供が読んだりにたりすることに反対している。

第三に、シンガポールの日本漫画とアニメ文化は

まだ成熟していない。漫画を読む人口の割合がそれほど高くない。日本の『少年ジャンプ』と『少年マガジン』は、一回三百万～六百万冊売れ行きがある。香港と台湾の日本漫画雑誌は、一回約十万冊売れている。シンガポールで最も人気のある日本漫画雑誌である *Comic Weekly* の売り上げは、一回七千五百冊だけである。単行本の場合は、人気作品が、日本では一回百万冊以上、香港、台湾とタイでは十万冊以上、インドネシアでさえも四万冊ほど売れている。例えば、台湾では『クレヨンしんちゃん』が、かつて一回に六十万冊という記録を出したことがある。香港における『ドラゴンボール』や『スラムダンク』、タイの『クレヨンしんちゃん』も、一回につき十萬冊が市場に出回ったこともあった。インドネシアの『ドラえもん』も、一回に四万冊が販売された。シンガポールで最も売れている作品である『ドラゴンボール』と『スラムダンク』の売り上げは、一回一万冊以下である。シンガポールで最も人気がある少女漫画『セーラームーン』は、毎回五千冊前後しか売れなかった。もし、台湾や香港で、一回五千冊しか売れない作品が出れば、廃刊されるだろう。創芸のほとんどの日本漫画本は、毎回二、三千冊しか売れておらず、それらはなんとか元は取れてはいるものの、利益を得ているとはいえない。市場が狭いので、日本漫画の地元の出版社は一軒しかない。また、地元で出版される日本漫画雑誌は一冊もない。

一方、シンガポールにおける人気日本アニメの視聴率は5～7%である。それに対し、日本、台湾、香港では約20%に達している。現在シンガポールのテレビでは週に25本の日本アニメ番組、15時間かけて放送されている。この放送時間は香港の3分の1に過ぎない。シンガポール人は、あまり漫画とアニメ雑誌を読まないで、最近の情報をよく知らない。たくさんの人々が、今でも、数年前に日本で流行していた漫画本を読んだり、アニメを見たりしている。

第四に、シンガポールの日本漫画とアニメの内容は、比較的健全である。政府の検閲基準は大変厳しいため、全ての作品の内容が細かく検閲される。猥褻、暴力、不良といったものが含まれている作品は禁止されている。全ての漫画は、新聞芸術部の認可